

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Alfred de VignyのCinq-Marsについて
Author(s)	田中, 隆二
Citation	フランス文学 , 8 : 66 - 77
Issue Date	1966-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040879
Right	
Relation	



Alfred de Vigny の Cinq-Mars について

田 中 隆 二

Alfred de Vigny の Cinq-Mars について、その成立経過をたどり、作品の特質と、彼の作品の中での、この作品の位置を考えてみたいと思う。

——叙事詩と歴史小説——1837年 *Le Journal d'un Poète* の中で、Vigny は Cinq-Mars 成立の経緯をみずから語っている。それによると、彼の歴史にたいする関心は少年時代から強く、歴史研究も相当すすんでいた。十四才の時には Cardinal de Retz の回想録を読んで、フロンド (La Fronde) の歴史を書こうと思いついた程であった。

Sur Cinq-Mars -Mes études historiques furent poussées fort avant dès l'enfance . . .

Après avoir lu les mémoires du Cardinal de Retz, il me vint dans l'esprit d'écrire l'histoire de la Fronde. J'avais quatorze ans, . . . (註1)

歴史小説 Cinq-Mars は、この意味からも当然書かれるべき作品であり、一つの清算であった。(註2)しかし、Cinq-Mars の成立には、別な二つの力が、より直接にかかわっている。一つは大叙事詩を書こうとする大望で、これが、小説 Cinq-Mars の底流ともなっているのである。*Le Journal d'un Poète* は 1823 年の日付けで始まっている。この時期の Vigny にとっては、Dante や Milton、近い時代の人としては Chateaubriand 等の大詩人と比肩し得るような宗教的叙事詩を書く事が念願であった。Tel peut être le sujet d'un poème immense qui achèverait l'œuvre du (sic) Dante et de Milton, continuée par Chateaubriand, c'est-à-dire la création des machines poétiques de l'ère chrétienne. Il y a là une belle place vacante pour asseoir un grand poète. (*Le Journal d'un Poète*, 1823) Eloa や *Le Déluge* はこうした野心を母胎として生まれた。Vigny はやがて、地上に引き戻され、歴史小説に没頭するようになる。しかし、この歴史小説への移行は全く異質なものへの切り替えとは考えられない。Cinq-Mars が出版された後ではあるけれども、1829 年の *Le Journal d'un Poète* にみられる言葉は、彼の歴史小説と叙事詩との関連をよく示していると思われる。

L'Iliade, La Jérusalem délivrée sont des romans historiques plus les vers et le merveilleux. Télémaque, Les Martyrs sont des romans historiques plus le merveilleux seul. Ivanhoé est un roman historique.

また、フロンド (La Fronde) の歴史を書くことを断念した後、Vigny は Homère を英語に訳すと云う作業で偉大な叙事詩に接した。しかし、彼はそうした大叙事詩に匹敵するような大きな構成を持つ詩作品を創造し得なかったことを遺憾としている。このことは、叙事詩から歴史小説への移行と云うよりは、Cinq-Mars で作者の狙ったものは、散文の叙事詩ではなかったであろうかと考えさせる。(註3)

Bientôt j'abandonnai cette idée(d'écrire l'histoire de la Fronde ——筆者註) pour adorer

les Poètes quand on me fit traduire Homère du grec en anglais et comparer page par page à l'Iliade de Pope. L'abbé de Gaillard, l'un de mes instituteurs, eut l'excellente idée de ce travail qui m'enseignait deux langues avec le sentiment de la Muse épique dont la Lyre résonnait deux fois à mes oreilles. Cependant après que cet invincible amour de l'harmonie se fut exhalé en vers dans mes poèmes, il me restait un regret, c'était de n'avoir rien créé d'assez large pour être comparable par la composition aux grands Poèmes épiques.

同様なことは次の文章からもうかがえる。

Or on pourrait dire aussi bien: Ivanhoé est un poème sans le merveilleux et les vers. Les Martyrs sont un poème sans les vers. La Jérusalem est un poème. (Journal d'un Poète, 1829年, 先に引用したものの後半にあたる。) このことは, Vigny の歴史小説の特殊性として, 大きな問題となることだが, ここではただ, Cinq-Mars が Les Martyrs 式の散文叙事詩の影響下で生まれたものだと言ふところでとめて置きたい。いま一つの力とは, Walter Scott の歴史小説の影響である。Mérimée の Chronique du règne de Charles IX (1829年), Balzac の Les Chouans (1829年), V. Hugo の Notre-Dame de Paris (1831年) 等と共に, Vigny の Cinq-Mars も Walter Scott ばりの綿密な資料蒐集に基き, 更に一貫した思想を軸としてつくられている。Cinq-Mars の意義の一つは, こうした作品, つまり本格的な歴史小説の先陣をうけたまわった (Cinq-Mars は 1826 年に出版された) ことなのだが, これは, 必ずしもすべての榮譽をこの作品に与えてはいない。と云うのは, 一口で云えば, 彼が歴史 (或は, 彼が歴史だと考えたもの) をあまりにも多く小説の中にもちこみすぎたからである。結果的には失敗であって, 彼はこの点で誤謬を犯したと云い切つてしまうこともできる。しかし, 何故, 彼がこうしたかということは, 既に述べた彼の叙事詩と歴史小説のかかわりと密接であって, 彼の姿勢からすれば当然だと考えられる。しかもこれには 1823年 Maine Giraud を訪れたことが大いにあずかっている。Vigny と, 伯母 Sophie de Baraudin の出合いが Montesquieu 流の思想にながしかをそえて Cinq-Mars にみられる歴史解釈の骨格をなしたと思われる。しかし, Vigny の歴史小説もその契機からすると Walter Scott の全ヨーロッパにわたる流行を証明したことにつくる。1823年 2月 V. Hugo に宛てた手紙 (V. Hugo の Han d'Islande についての感想を書き送ったもの)

Vous (V. Hugo のこと一筆者註) avez posé en France les fondements de Walter Scott. Votre beau livre sera pour nous comme le pont de lui à nous et le passage de ses couleurs à celles de France. Faites un pas; naturalisez le génie que vous avez jeté sur la Norvège, changez les noms et les décorations, et nous serons plus fiers que des Ecosais. (A V. Hugo. Orléans, février, 1823)

更に同年 8月, 同じく V. Hugo に宛てた手紙 (V. Hugo が Quentin Durwal で Walter Scott がなしたフランスの歴史への入寇に文句をつけたことに賛同したもの)

••• Je vous remercie d'avoir grondé Walter Scott. Je lui en veux mortellement de déflorer ainsi notre histoire pour habiller de ses nobles traits ses paysans d'Ecosse. C'est ainsi

qu'il donne en pur don à son Balafre la réponse d'un gentilhomme français au cardinal de Richelieu, qui lui proposait un petit assassinat; il est vrai que la scène de Philippe de Comines doit l'absoudre à nos yeux de bien des péchés . . . (A. V. Hugo. Bordeaux, 26 août, 1823)

等でわかるように、このあたりから、1837年に、 . . . Je cherchai à faire le contraire de ce travail et à renverser sa manière. と書かれるようになる気運が生じたと思われる。同じ *Journal d'un Poète* のこの後に続く部分で、Vigny は *Cinq-Mars* の全計画をたてたのが、いつ、また何処であったのかを我々に告げる。それは、1824年 *Les Pyrénées* の山中、Oloron に於てであった。

——史実の歪曲と作品の特質—— 前述した1837年の *Le Journal d'un Poète* は Walter Scott に関する部分も含んでいる。それは次のように始まり、先に引用した言葉で終わっている。

. . . Je pensais que les romans historiques de Walter Scott étaient trop faciles à faire en ce que l'action était placée dans des personnages inventés que l'on fait agir comme l'on veut tandis qu'il passe, de loin en loin, à l'horizon une grande figure historique dont la présence accroît l'importance du livre et lui donne une date. Ces Rois ne représentant ainsi qu'un chiffre, je cherchai à faire le contraire de ce travail et à renverser sa manière.

Walter Scott 流の歴史小説だと、衣服や、言語、習慣同様、著名な人物も時代の再現に信憑性を与えるための道具立か、或は、年代を表わす数字の代りに用いられる。Vigny は彼等にもっと重要な役を荷わせようとする。同じような事を「芸術に於ける真に関する省察」(*Les Réflexions sur la vérité dans l'art*) では次のように書いている。

. . . je crus aussi ne pas devoir imiter les étrangers, qui, dans leurs tableaux, montrent à peine à l'horizon les hommes dominants de leur histoire; je plaçai les nôtres sur le devant de la scène, je les fis principaux acteurs de cette tragédie . . .

Cinq-Mars 成立に Walter Scott の影響が見逃せないものがあることは既にみて来た。ここに引用した事は更に確かなものとしてそれを裏づける。しかし、意図からすると、単なる模倣ではなく、むしろ、政治的な意味を含む反動でこれが書かれたとも考えられる。具体的には、歴史上実在の人物の取り扱い方としてそれはあらわれる。Vigny にとって意義あるこの企ては、しかしながら、必ずしも良い結果を与えはしない。何故なら、*Cinq-Mars* は最初好評をもって迎えられたが、時代が下るにつれて厳しく批判されるようになるからである。そうして、その批判はすべて一点に集中する。ごく簡単に小説の梗概を述べて、もう少し具体的にこの点にふれてみる。

——小説はフランスの庭と謳われる Touraine を舞台に、1639年のこととして始まる。主人公 *Cinq-Mars* 侯爵たる若き Henri d'Effiat は、枢機卿 Richelieu へ、彼から王 Louis 13世へ目通りをさせて貰うべく推薦書を持って宮廷へ赴く。Henri は大きな野心を抱いている。それは折から彼の母の許へ身を寄せていた Princesse Marie de Gonzague への愛の為で、彼女を娶るには、非常な名声を得て高位に昇らねばならない。全篇26章のうち、はじ

めの8章は、この恋のため、大きな政治的役割を演じようと夢見て、野心家 Cinq-Mars が昇進の機会を掴むため Perpignan の攻囲戦へ馳せ参ずる様子を述べている。第9章から第19章まででは、その攻囲戦の軍功によって Cinq-Mars は王の注意をひき、1642年には既に王の寵臣の一人となっている。彼は Richelieu に対抗する一派の最も名の聞えた人物の一人でさえある。彼は王弟 Gaston d'Orléans や王妃 Anne d'Autriche の側近でめぐらされている陰謀に左袒する。王も Cinq-Mars から Richelieu によってしいたげられているフランスの苦悶を知らされ、宰相を取り除くことに同意しそうになる。しかし、王はまた Richelieu の企てにおちいって心を繻す。20章から24章が、その Richelieu の捲き返しの段である。陰謀は Joseph 神父というスパイによって、その全容が宰相に告げられる。謀が破れたと知ると、王弟はじめ主謀者達は Richelieu の前に土下座して命乞いをし、王妃も陰謀支持をやめる。Marie de Gonzague も身分の低い者との結婚をためらう。希望を失った Cinq-Mars は、みずから囚者の身となる。25章と26章には、Richelieu の勝利が描かれ、Richelieu を裏切る準備万端を整えて現われた Joseph 神父の協力を拒んで、Cinq-Mars は忠実な友 de Thou と一緒に Lyon で処刑される。彼の死と共に Marie de Gonzague は徒な夢を捨てて、ポーランドの王妃の地位を受諾する。

以上が Cinq-Mars のあらすじであるが、非難の的となったのは何かと云うと、史実の改変である。それは二つに分けられる。一つは年月上の違いである。主要なものをあげてみると、第一章 Les adieux に Bassompierre 元帥が登場する。彼は別れの宴の間中貴族制度についてしゃべりまくるのだが、この人物は史実によるとずっと以前から投獄されている。したがって、1639年に Cinq-Mars 達と会食することは出来ない筈なのである。また Cinq-Mars が処刑に立ち会った事になっている Urbain Grandier の宗教裁判は1635年のことで、これも1639年には起り得ない。もう一つは出て来る人物が変貌していることである。たとえば、主人公 Cinq-Mars からして、普通考えられている歴史上の人物とは異なっている。彼は Richelieu の子飼いであった。Richelieu によって王 Louis 13世の身边に送り込まれ、スパイの役を強要されたが、それがいやさに Richelieu に叛逆したのだとも考えられている。それに派手好みで情事にあけくれ、王からも幾度か叱責されていたのである。Richelieu の圧政からフランスを救おうとして立ち上った国民的英雄とされるには、いろいろと不都合な点があるし、それ程偉大な人物ではない。Cinq-Mars の謀反とは、観方を変えれば、Richelieu が飼い犬に手を噛まれた事件にすぎないのである。(註4) Cinq-Mars の描き方はまだ許せるとしても、Richelieu の描き方には承服しない人が多い。外敵の脅威と渦巻く陰謀の中で、フランスを守り通し、太陽王 Louis 14世の光輝ある時代を準備したのは彼であるから、国民的英雄とはむしろこの宰相の方である。しかも彼は Académie française の創始者である。復讐の恐ろしさを作者は後に思い知らされるであろう。(註5) そのほか、Louis 13世の描き方にも問題がある) 更に) Joseph 神父の描き方も大いに論議的となる。Marie de Gonzague の描き方すら問題にならなくはない。人物ばかりではなく陰謀そのものの性格も問題となってくる。しかし、年月上の違いにしる、人

物の改変にしる、史実との違いを数えたてると夥しいものになる、この作品を非難しようとしてそれ等を列挙しても、最もつまらない衒学的態度にしかなるまいとさえ云われている。それに歴史小説は芸術の領域に属するものである。歴史科学とは異って、史実と少しでも喰い違いがあれば作品としての価値を失ってしまうものではない、むしろ、作家が敢えて史実に反してまでも、或る人物を登場せしめたり、或る事件を展開させているとすれば、それは、その作家が劇的効果を計算しているからである。そうすることによって詩的真実に光を点じようとしているからである。Vigny の場合、この作業は、我々の眼には欠点としてしか映らない。それは登場人物が創作された人物ではないからである。更に彼は自分の一面的な歴史解釈を開陳するのに急で、科学的に歴史を解明しようとする顧慮には欠けている。だが、彼は歴史家ではないし、厳密な意味での歴史を書こうとしたとも云い難い。Anatole France は 1868 年に処女作「Alfred de Vigny 論」を出版した。その中で夙に古書に親しみ歴史に通じていて、しかもその当時は科学主義であった作者は、Vigny の歴史小説のつくり方は不思議な矛盾だと評している。(註6) 確かに、歴史から与えられたものとはかけ離れたものをつくるのに、何故歴史を援用するのか。偽りの細部でもって、どの様にして一般的真実がうちたてられるのかと云う疑義が生ずる。しかし、Vigny は、もともと叙事詩を書く野心を抱いていたのである。彼が歴史小説で試みたことは一時代の再現にとどまっていな。登場人物は当時そうであったように描かれていると云うよりも、作者の解釈を受けて、時代的なある動き、ある観念の例証として象徴的に描かれている。彼にとって重要なのは、第一に思想である。歴史家はまず探索し、次いで結論するのであるが、Vigny は結論した後、その証拠を探ねた。したがって資料の中には充分信頼を置けないものもあったかも知れない。選んだ人物も首尾一貫して彼の思想の例証とはなり得なかったであろう。しかし、これを Vigny の歴史小説の欠陥として指摘するよりも、ここでは彼の独自性を表わすものとしてとりあげたい。(註7) 歴史上実在の人物、或は、実在したかどうかは別として、著名な人物を、ある思想の例証として象徴的に描くと云うこの方法は、彼の一つの特質である。これは、詩 Moïse でも気づかれることだが、Stello の三つの挿話、更には、その一つからつくられた Chatterton で、より確定した形をとる。Chatterton は勿論だが、まだ背景とのつながりを望む気持の強い Stello の挿話でも、その戯画化する方法こそ、多少ゆき過ぎていると思われようが、史実との喰い違いは(たとえあったとしても)問題にはならないであろう。Stello は既に歴史小説ではないと我々に感じさせるからである。ところが Cinq-Mars はそうではない。それどころか、歴史小説である(ありすぎる)ようにさえ思える。それは作者の意図から来るのではないだろうか。厳密な意味でのそれではないけれども、彼一流の観方で歴史を書こうとしたと思われるのである。(註8) 矛盾の源はここにある。彼は歴史を書くに云う意図の下で歴史小説を書いた。もし、こう云う表現が許されれば、それも、歴史小説と云う形で、彼の企図する大叙事詩の一環となるものを書いたのではなからうか。この意味から、Anatole France の批評は当を得たものとなる。またこのことは、Vigny の場合、年代の順番を変えてまで、或

る人物を登場させたり、或る事件を展開させたりすることが、劇的効果もさる事ながら、作中の人物にある思想を述べさせようと云う意図を持っていることから証明されるであろう。具体的に述べると、劇的効果の面からは、先にふれた Urbain Grandier の宗教裁判の場面がその一つの例となる。Urbain Grandier は Cinq-Mars が Perpignan への途中で会うためには、実際より何年間か苦痛を長引かされているわけだが、彼の受ける残酷な刑罰（生きながらの火焙りの刑）は、そのでっちあげ裁判同様、Cinq-Mars が全フランスを救うために決起せざるを得ない、政治的、かつまた人道上の理由を準備する。この場面は、この後に続く、狂乱の Jeanne de Belfiel が Cinq-Mars の休んでいる枕辺で彼の死を予告する場面や、その狂女が懐剣を手にして Richelieu に迫る場面、更に Richelieu に盲従する Laubardemont が自分の息子を Les Pyrénées の断崖から深い淵へ沈める場面等と共に、陰惨で、おぞましい地獄絵をみせる。しかしそれ等程には怪奇趣味に染まってはいない。或る程度は時代の雰囲気をつげる目的にかなっている。作者の思想を代って述べるために登場させられた人物としては、まず例の Bassompierre 元帥が現われる。Vigny が、このような小説を書こうとした意図、これに盛ろうとした彼の思想、そうしたものの幾分かを、我々はこの Bassompierre 元帥の言葉の中に探ねることが出来る。元帥の言葉を要約すると、次のようになる。「先王 Henri 4 世の時代に於ては、宮廷は王のサロンにすぎず、王は友として諸侯をむかえた。諸侯と王を結んでいたのは彼等の王に対する忠誠心と友愛とであった。したがって、その時代にも内乱はあったが、王権を篡奪しようとするような叛意あつてのものではなかった。一時的な争いにすぎず、すぐに秩序は回復して来たのである。しかるにわれわれ大貴族を押し潰そうと云うのは、一体如何なる事なのか。王座を支える腕を折り、その後を修復しなければ、どんな事態が起るか測り知れない。樞機卿 Richelieu は、今やその計画を完遂すること疑いの余地ないところだが、大貴族が領地を離れ、また領地を失うと、当然ながら権力を失う。そうすると宮廷は請願者の押しかける宮殿にすぎなくなるであろう。何よりも恐ろしいのは、貴族が庶民の上に勢威を振えなくなること、そうなればやがて民衆が暴動を起す日が来るであろう。（註9）小説の冒頭で貴族制度崩壊を予告するこの Bassompierre に配するに、巻末で大革命の前提となる Richelieu の暴政を註釈する Corneille と Milton の姿がある。Corneille はこの二人の若者、Cinq-Mars と de Thou の死をもって、古き君主制の最後の吐息とみなす。大貴族も元老院も今は亡いのである。Milton は、フランスの君主制の礎をくずすからには、Richelieuこそ未来の共和政体をつくり出そうとする人物かとたずねるが、Corneille は、Richelieu にその意図を求めるのはゆき過ぎで、彼にしても、彼がその業績をついだ Louis 11世にしても、自分達が行っていることがわかっていたのではなかった。（註10）Richelieu はただ死ぬ迄統治するのを望んだだけだと答えるのである。これらの、anachronisme とそしられる因をつくったり、眉唾ものと誰でも思わざるを得ない出会いを持つ人物達は、畢竟、作者の歴史解釈を代って述べているのである。大革命ですべてを失い、あまつさえ、苗字の前に de があると云うだけの理由で、迫害さえ受けた作者が、ブルボン (Les Bourbons) 王朝潰滅の原因を、

1789年の大革命よりも遙かに遠く、Richelieuの政策の中にある大貴族の組織的改易に見ようと云うものである。即ち Louis 13世の宰相であった Richelieu がとった水平化の暴政は、東の間の絶対王制の後日の失墜を準備したに過ぎなかったと云うのである。これを一言にして云えば、革命で没落した全貴族階級のためを計る回顧的弁護となろうか。いずれにしても、ここで重要なのはこの点にこそ Vigny の特質がみられることである。一つは既に述べた手法上の問題で、この様な貴族の歴史を書くとの意図から、必然的に Cinq-Mars が英雄化され、Richelieu は usurpateur として描かれるようになる。また Louis 13世は優柔不断の典型となるのである。今一つは、貴族の歴史と云う言葉に含まれている、その貴族と云う家柄に対する意識の問題である。これが、この作品の支えとなっていることに異論はないと思われるが、この意識は彼の殆んどすべての作品につきまわっていると云っても過言ではないであろう。運命詩集 (Les Destinées) 中の最後の詩 L'Esprit Pur が証拠を見せてくれるように、彼は死ぬ迄この固定観念、劣等感とさえ云えるものから解放されない。歴史小説 Cinq-Mars の全篇には、没落した貴族の一員として彼が抱いている憾み、訴えが綴られているのである。作品のもつもう一つの特色である、描写力の素晴らしさを看過するのは片手落ちとなろう。これはロマン主義時代の歴史小説の特色をなす地方色として、ここでも現われている。そのいくつかをあげるのは容易である。しかし、或る批評家が賞めすぎることのないとたたえる自然描写の絶品も、別な批評家の手にかかると陳腐な風景描写にすぎない色褪せたものと早変わりする。それは、Urbain Grandier の章の前後、L'orage の章の父子相争う陰惨な場面が、ロマン主義の欠点とみなされる悪魔主義への趣味を持っているのは事実だが、その悪魔主義も本当に欠点かどうかは断定出来ないように、観点が変わると評価も変わるからである。我々としては、むしろこの作品に描かれている風景が、作者の、実際見たものによっていること、風景描写に限らず、この小説にもられている種々なものが、Vigny の当時の生活とつながりがあることを述べるにとどめた方が良いと思われる。

——青春の挽歌と真の使命への門出—— 既に引用したように、1837年の Journal d'un Poète の中で、Vigny は Cinq-Mars の構想ができたのは、1824年 Oloron に於てであったと書いている。この作品が世に出たのは1826年4月のことであるから、完成されるまでには2年の才月が流れている。その間に彼が必要な文献を漁ったことは既に証明済みであり、また頭の中の計画を十分に熟せしめたことは想像にかたくない。(註11) しかし、ここで問題となるのは、この時期を中心とする何年間かの間に Vigny の身边に起った出来事と、Cinq-Mars との関連である。Cinq-Mars が1826年迄の作者の経験の集約であるとはよく云われる事である。だが、それは、小説の第5章 Le songe にみられる、つかれきって騎行する Cinq-Mars の姿が、軍隊の屈従と偉大 (Servitude et grandeur militaires) の第1話に出て来る若い騎兵将校によく似ていて、作者の体験から出たものであろうと推察されることや、第22章 L'orage の章の、その orage そのものが、Les Pyrénées の奥で、実際に目撃されたものであって、詩 Le Déluge のヒントとなったものであることばかりではない。

Cinq-Mars と Marie de Gonzague の結ばれなかった恋、Marie de Gonzague が、心ならずも、最後にはポーランドの王妃の地位を受諾すること、Cinq-Mars が抱いていた赫々たる栄光への夢が破れ去ったことなどは、作者の実らなかつた恋や、イギリスの女との結婚、軍隊生活から遂に得ることのできなかつた栄誉、度々賜暇を願った後にやって来る退役と云った、実生活上のいろいろな事件との微妙で密接な関係をうかがわせるからである。Vigny が Delphine Gay と識り合ったのは、1822年から1823年の間とされている。(註12) この18才の金髪の Muse を Vigny は娶ろうとしたのだが、母の反対にあつて断念した。彼等の結婚が実現しなかつたのは、彼女の1833年(その時には、Girardin 夫人となつてゐた)の詩 Napoline の notes にあるように、彼女が貧しかつたことにある。(註13) もっとも Vigny の母親が彼にこの結婚を諦めさせたのは、家門の過去を利用してであつた。Cinq-Mars と Marie de Gonzague の場合は立場が逆である。しかもこの恋愛は実際に Cinq-Mars の謀反にかなりの影響力を持っている。Vigny と Delphine Gay との恋を男女の立場だけ変えて表わしたものと云えない。(註14) また Vigny は 1825年2月3日イギリスの富豪の娘 Lydia Bunbury と結婚している。彼女との結婚は、彼に幸福をもたらさなかつた。思い通りの金銭的恩恵に浴さなかつたからである。それ以上に悪いことには、彼女は運命の書に記載済みであるかのように、彼に看護人の役目を課した。けれども、はじめから Marie de Gonzague のような気持で彼が結婚したと云う証拠はない。Cinq-Mars にわれわれが見て取れると思うのは、上述のような実生活の漠としたかげを透して映される作者の若き日の情熱であり、作品に、にじむ哀惜の念である。Delphine Gay との恋愛については Journal d'un Poète には少しの裏づけとなるものもみられない。これは Girardin 夫人の側から資料を提供されるべき事件の観を呈する。廿才に足りない Delphine が若く凛凛しい士官であつたこの詩人に純な愛情を抱いたのは事実らしく、その反面、心の傷は深く、後年になってその跡をみせる。一方、若い士官の方には、この時期にそれより一層彼をひきつけるもの、栄光への道を拓くかにみえる事態が起つてゐた。彼はスペインへの遠征に参加しようとして La Garde Royale より Le 55^e de ligne へ転籍し、大尉となる。Vigny としては捲土重来の好機であつた。彼は元来 L'Ecole Polytechnique に入ることを夢見てゐた。ところが Napoléon の敗北で彼の進むべき方向は変えられ、王の近衛騎兵隊に入隊した、このことは一見、殊のほか優遇されたように考えられるが、実はそうではない。十幾年間の軍隊生活での失望の起源はここにある。何故なら、遁走こそ、そんなに度々ではなかつたであろうが、彼の属した貴族階級の軍隊は、退屈な屯営生活の中で訓練と閱兵にあけくれ、戦らしい戦はしなかつたからである。Vigny が大尉になれたのは古参の順によるもので、軍功のためではなかつた。スペインの遠征こそ、長年夢見てきた栄光、Vigny や Baraudin の名を持つ先祖達が勝ち得たのと同じ栄光を約束するかのようによつたのである。しかし、運命はあくまでも、彼に別な道を進むことを要求した。同僚の d'Houdetot, Taylor, Dittmer, de Cailleux, Gaspard de Pons 等は、大なり小なり軍功を樹立したが、Vigny は遠征に参加する機会を得ず、憂鬱な駐屯生活を送る。この時期より、彼の休暇願

いが目立ち始める。健康と家庭的事情によるものである。1824年2月3日、3ヶ月の休暇をとる（これは第2回目で、第1回は1822年にとっている）。この休暇は更に1ヶ月延長され、同年6月6日迄続く。（この間に *Cinq-Mars* を書くに必要な資料をあつめたと云われている。）1825年は結婚の年である。Vigny はその前年、1824年10月からまた休暇をとっていたが、これは結婚後も続く。1825年にはまだ軍隊に未練があった。しかし、最後の賜暇を願って彼は1826年の間中、ずっと Paris にいた。そうして、それは遂に1827年の辞職願いにいたるのである。この退役の決心と呼応するかのように、1826年は文学作品の花盛りとなる。古今詩集 (*Poèmes antiques et modernes*) と、歴史小説 *Cinq-Mars* が出版されるのである。Vigny の文学生活への第一歩は、1837年の *Journal d'un Poète* の言葉を知りれば、フロンド (*La Fronde*) の歴史を書くことに始まった。その意味からも *Cinq-Mars* は意義深い作品だが、その14.5才の少年期に、彼は *Homère* をギリシャ語から英語へ翻訳することにも熱中していた。ついで軍務の合間に読み耽った書物 (*La Bible*, *Le Paradis perdu*, *Le Génie du Christianisme*) や、Byron, André Chénier の詩から、彼の初期の作品が生まれる。Vigny は *Conservateur littéraire* に Byron についての小品をのせる。つづいて詩 *Le Bal* が同じ雑誌に掲載された。1820年のことである。1822年に詩集 (*Les Poèmes*) が出版される。これには *Héléna*, *La Dryade*, *Symétha*, *La Somnambule*, *La Fille de Jéphthé*, *Le Bain*, *La Femme adultère*, *La Prison*, *Le Bal*, *Le Malheur* が含まれている。*Le Trappiste* も同年に発表された。*La Neige* は *Tablettes romantiques* に、*Dolorida* は *La Muse Française* に、共に1823年に発表される。1824年には *Eloa* が発表され、そうして1826年 *Les Poèmes antiques et modernes* の刊行をみるのである。その中の *Moïse*, *Le Déluge*, *Le Cor* はこの時はじめて公表された。*Cinq-Mars* がこの古今詩集と同年に出版されたことは既に述べたところであるが、破棄された初期の作品を別とすれば、これが散文で書かれた第一の大作となることは注目すべきである。Vigny はまだこれから数多くの詩を書く。しかし *Cinq-Mars* 発表後、彼が活躍するのは、韻文での Shakespeare の翻訳に始まり散文の傑作 *Chatterton* にいたる戯曲と、*Stello*, *Servitude et grandeur militaires* と続く小説等の主として散文の領域に於てである。その中、*Stello* はこの1826年の *Cinq-Mars* から、*Maine Giraud* へ隠棲して、また詩作に耽ける時期までの12年間の中間に位置する。その *Stello* が告げるように Vigny は彼の使命を自覚し、後に *L'Esprit Pur* で誇らかに宣言する清朗な世界へ進む。その一筋に辿る道へ大きく踏出す第一歩を印するのが、歴史小説 *Cinq-Mars* である。この作品の成功は彼の予想通りであった。恰も、死の直前に、彼には世紀を越えて、勝利が確信できた如くに。

Cinq-Mars によって Vigny は歴史小説の流行を証明した。彼の独創性は、まだ充分ではなかったが、この作品ではっきりした形をみせる。進むべき道が定まり、完成への鏤刻彫琢の日々が始まる。

- 註1 Cinq-Mars の成立については、回想形式ではあるけれども、Journal d'un Poète 1837 年のこの項で作者みずからによって語られている。ここで全文を引用するのは、却って煩雑になるので、関連する事項毎に区切って引用する。
- 註2 Vigny 自身の表現をかりれば次のようになる。
Il me sembla depuis acquitter une véritable dette d'amitié lorsque j'écrivis Cinq-Mars et peignis l'abbé de Gondî.
- 註3 Journal d'un Poète 1837年 Sur Cinq-Mars の項の末尾に Vigny は次のように記している。
J'avais d'ailleurs le désir de faire une suite de romans historiques qui serait comme l'Epopée de la Noblesse et dont Cinq-Mars était le commencement—J'en écrirai un dont l'époque est celle de Louis XIV, un autre qui sera celle de la Révolution et l'Empire; c'est-à-dire la fin de cette race morte socialement depuis 1789.
- 註4 Philippe Erlanger はその Cinq-Mars ou la passion et la fatalité の Epilogue で次のように書いている。
La conspiration de Cinq-Mars ne ressemble pas à tant d'autres, ce favori n'est pas comparable à ceux qui, au cours du XVII^e siècle, influencèrent le destin des nations. Les historiens ont accablé Henri d'Effiat de leur mépris. Des poètes et des romanciers lui ont tressé des couronnes. En général les uns ont manqué d'équité, les autres de jugement.
- 註5 Cinq-Mars に対する毀誉褒貶は、出版の年に始まっている。毀の魁は Sainte-Beuve が、また褒のそれは Hugo がなしたが、貶の最たるものは、1846年1月29日 Molé 伯爵によってなされた 翰林院での演説にみられるであろう。この意見には Sainte-Beuve が快哉を叫んだだけでなく、地下の Richelieu も己の名誉回復が果されたと喜んでに違いない。しかし、これによって顔色なからしめられたかにみえた Vigny よりも、現在では不名誉に近い苦汁を嘗めているのはむしろ Molé 伯の方ではないだろうか。以下に、部分的ではあるが、伯爵の言葉を引用して置く。
• • • au lieu de vous livrer exclusivement à votre imagination si riche et si féconde, vous avez presque toujours emprunté à l'histoire du passé ou à l'histoire contemporaine les faits et les caractères dont vous avez su tirer des compositions qui vous sont propres, et ont tout le mérite de l'originalité, C'est ce que vous appelez, si je ne me trompe, la vérité dans l'art, paroles qui renferment tout un système, et dont vous avez fait l'exposition dans un petit traité. Cette vérité dans l'art, si j'ai su la comprendre, n'est autre chose que ce que nous appelons, nous simples lecteurs, le roman historique dans sa plus grande extension. J'ai peu de goût, il faut bien que je le confesse, pour ces atteintes si profondes portées à la vérité, et par conséquent à la moralité de l'histoire. Mais je m'empresse de l'ajouter, le roman historique peut les éviter. Rien ne captive davantage, n'intéresse plus vivement que l'effort du talent ou du génie s'appliquant à faire revivre le passé et à placer tout le drame de la vie humaine au milieu d'institutions et de mœurs qui ont cessé d'exister. N'est-ce pas là ce que Walter Scott a fait, Monsieur, surtout dans l'un de ses plus beaux ouvrages, les Puritains? Tel n'a pas été votre dessein dans Cinq-Mars. C'est l'histoire elle-même arrangée avec art, mais arrangée en roman. Tous les faits y sont empruntés à nos annales, et il en est bien peu auxquels votre imagination si fertile et si brillante ait laissé toute leur identité. Quant à vos personnages, ils sont assurément les plus considérables de

l'époque. Si vous vous étiez contenté de faire revivre, pour le besoin du drame, le père Joseph, mort quatre ans auparavant, de prendre pour votre héros Cinq-Mars, ce favori de vingt-deux ans, présomptueux et vain, rival étourdi autant que téméraire de Richelieu, et qui, pour se débarrasser du premier ministre, voulait livrer la France aux étrangers, je vous demanderais seulement si ce n'est pas étendre un peu loin le programme ou les droits de la vérité dans l'art! . . .

註6 Etrange contradiction! M. de Vigny, les documents en main, compose un roman historique et repousse jusqu'à la pensée d'y faire intervenir la vérité historique. (œuvres complètes illustrées de (sic) Anatole France, Tome I, Alfred de Vigny, p. 47)

註7 Vigny 自身こうした方法が、所謂歴史小説には向かないことを覚ったと思われる。その証拠に、彼は Cinq-Mars を皮切とする一連の歴史小説を計画しながら実行していない。1859年の Journal d'un Poète の記事は、彼みずから Cinq-Mars の失敗を認めていることを告げると思われる。

Vous êtes, Sire, très indulgent pour Cinq-Mars, moi je ne le suis pas autant que vous. Si je n'ai pas écrit un second roman historique, c'est parce que j'ai reconnu qu'il est vulnérable par un point, le vrai réel des faits.

註8 多くの批評家は Vigny の ce qui fait l'originalité de ces livres, c'est que tout y a l'air roman et que tout y est histoire と云う言葉を次のように置き換えている。Tout y a l'air histoire, tout y est roman. 実際にできあがったものは言葉を置き換えられた文章のようなものになっているであろうが、作者自身の意識としては、彼の言葉通りではないだろうか。

註9 Bassompierre の言葉のいくつかを列挙して置く。Nous autres, vieux compagnons d'armes du feu roi, nous entendons mal la langue que parle la Cour nouvelle, et elle ne sait plus la nôtre . . .

La Cour autrefois n'était autre chose que le salon du Roi, où il recevait ses amis naturels, les nobles des grandes maisons, ses pairs, qui lui faisaient visite pour lui montrer leur dévouement et leur amitié . . .

Il est clair qu'alors on n'eut pas enlevé au Roi des serviteurs que l'amour seul attachait à lui . . .

Ces révoltes et ces guerres, Monsieur, n'ôtaient rien aux lois fondamentales de l'Etat et ne pouvaient pas plus renverser le trône que ne le ferait un duel . . . Nul ne s'est armé que contre une fraction, et non contre l'autorité souveraine, et cet accident détruit, tout fut rentré dans l'ordre. Mais qu'avez-vous fait en nous écrasant? Vous avez cassé les bras du trône et ne mettez rien à leur place. Oui, je n'en doute plus à présent, le Cardinal-duc accomplira son dessein en entier, la grande noblesse quittera et perdra ses terres et cessant d'être la grande propriété, cessera d'être une puissance . . . La Noblesse ne sera plus rien que par les emplois qu'elle aura reçus et si les peuples, sur lesquels elle n'aura plus d'influence, veulent se révolter . . .

註10 Richelieu 自身臚げながら、自分のしていることに危惧を感じているように Vigny は描いている。

Je renverse l'entourage du trône. Si sans le savoir, je sapais ses fondements et hâtais sa chute!

註11 1826年8月25日の Edouard Delprat宛の手紙に

Pendant six mois de l'hiver dernier j'écrivis ce Cinq-Mars qui est né au mois de mai

pour le public. とある。

- 註12 この項は Ernest Dupuy の Alfred de Vigny, ses amitiés, son rôle littéraire II, le rôle littéraire PP. 335~340 を参照。
- 註13 Alfred n'osait parler de moi à sa mère parce que j'étais pauvre et qu'elle m'aurait refusée. とある。
- 註14 実在の人物として Cinq-Mars 侯爵に大きな野心を抱かせた Marie de Gonzague は 1611年生まれであるから、1620年3月27日生まれの Cinq-Mars より9歳の年長であった。ところが、小説の中では18才の princesse として描かれているのである。(XXIII 章 L'absence 参照, Rêves de dix-huit ans! dit la Reine en soutenant Marie.)

参 考 文 献

- Pierre Georges Castex; Vigny, l'homme et l'œuvre, 1952.
Gustave Charlier; Le Sentiment de la Nature chez les Romantiques français, 1912.
Mark Citoleux; Alfred de Vigny, persistances classiques et affinités étrangères, 1924.
Ernest Dupuy; A. de Vigny, ses amitiés et son rôle littéraire, 2 vol., 1910-1912.
Ernest Dupuy; Alfred de Vigny, la vie et l'œuvre
Philippe Erlanger; Cinq-Mars ou la passion et la fatalité, 1962.
Anatole France; Alfred de Vigny
Pierre Flottes; A. de Vigny, 1925.
Pierre Flottes; La pensée politique et sociale d'Alfred de Vigny, 1926.
Raymond Isay; Vigny, la mer et les marins (La Revue des Deux Mondes 15 avril, 1956)
Emile Lauvrière; A. de Vigny, sa vie et son œuvre, 2 vol, 1946.